

本堂

西大寺の本堂は 1752 年に、東の塔がかつて立っていた場所の北側に、完全な木造でつくられた。この塔は当初、八角七重塔として計画されていたと考えられており、石の基壇が今でもまだ見ることができる。毎年 10 月に、本堂は「光明真言土砂加持大法会」と呼ばれる特別な真言律宗の宗教儀式に使用される。これらの厳粛な儀式は一般にも公開されていて、真言密教の真髓を見ることができる貴重な機会を提供している。

本堂には数多くの宝物が収められている。本尊は、重要文化財に指定されている釈迦の像であり、1249 年に叡尊（1201～1290 年）の依頼によってつくられた。本堂には、他にも重要文化財に指定されているものがある。それは堂々たる文殊の像である。文殊は知恵の菩薩であり、獅子の上に座り、4 人の従者に取り囲まれている。叡尊は文殊を強く信仰しており、この僧の功績を讃えるために、1290 年に叡尊が死去した後、弟子たちがこれらの仏像をつくった。本尊の釈迦像の背後の壁には、16 人の rakkan（仏教の賢人）の絵画が描かれている。その顔は様々な生き生きとした表情をしており、楽しい、ほとんどコミカルな効果を生み出している。